

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 44 2017. 03

特別寄稿

舘脇 操先生小伝 (第3回、最終回) 五十嵐 恒夫 ----- 1

活動報告

北大総合博物館中川光弘館長にインタビュー 大山 圭也・星野 フサ ----- 5

「北大古生物学の巨人たち」の準備にあたって 越前谷 宏紀 ----- 6

陸上植物標本庫(SAPS)を新しい分類体系(APGⅢ)に変更 吉中 弘介 ----- 7

4Dシアター ～リニューアル後、初めての公演を終えて～ 関上 遼 ----- 8

工学部前庭の吉町太郎一博士像と室蘭の吉町坂記念碑 久末 進一 ----- 9

博物館見学記

初めての「豊平館」 宮本 昌子 ----- 10

特別寄稿

舘脇 操先生小伝 (第3回、最終回)

北海道大学名誉教授 五十嵐 恒夫 (農学部林学科 1955 年卒業)

5. 舘脇先生の晩年の研究生活

1966 (昭和 41) 年頃、私が森林病理の研究室に使っていた農学部の地下室 (半地下) に突然、舘脇先生が訪れてこられた。先生は「70 代の仕事として 3 つの大きいことをしたいので、協力して欲しい。君も知っていると思うが、私のいた研究室もなくなってしまい、君に頼むしかないのだ」とのことであった。

全学的には大学院環境科学研究科が創設され、農学部植物学教室にあった不完全講座の植物分類講座が助教授 1 の定員を持ってこれに参加し、名誉教授の舘脇先生一人が取り残された状態となっていた。先生の言う 3 つの大きいこととは、(1) 北大天塩演習林、(2) 野幌国有林、(3) 阿寒国立公園の 3 地域の森林植生を書き上げることであった。

大学院を終了したが、定職もない状態であった私を演習林研究部の先生方が心配してくださり、天塩演習林の森林植生の調査を委託してくれていたこともあり、手足を失った状態の先生の研究を手助けす

ることとした。

(1) の天塩演習林の森林植生については、「舘脇 操・五十嵐恒夫 (1971) 北大天塩・中川地方演習林の森林植生. 北海道大学演習林研究報告, 28(1), 1-192」として公表された。

(2) の野幌森林については、札幌営林局から支援をいただき、「舘脇 操・五十嵐恒夫 (1973) 北海道石狩国野幌森林の植物学的研究. 札幌営林局, 355pp.」として公表された。

(3) の阿寒国立公園については、調査の外業はほぼ終了していたが、先生が亡くなられた後、「舘脇 操・五十嵐恒夫 (1977) 阿寒国立公園の植生. 帯広営林局, 149pp.」として公表された。

先生の阿寒に対する思い入れは大変大きいものがあり、学生時代に初めて訪れた時の印象、マリモの保護活動、昭和天皇はじめ内外の多くの研究者の案内やディスカッションなどの経過があった。

先生はいつも、論文のまえがきとあとがきはご自分で書かれていた。1975 年の 12 月下旬にまえがき

を書き、阿寒に行くと言って私の研究室にみえられた。健康も心配で、私も同行を申し出たが、拒否された。やむなく旅費を作りお渡しした。お帰りになってお会いすると、「阿寒では何も書けなかったよ」と言っておられた。帯広営林局には調査費を支出してもらっており、報告書を作成したが、これは先生の意図とはかけ離れたものであろうと思われる。

6. 館脇先生の受賞

先生は長年にわたり北太平洋諸島における森林生態的研究を推進されたが、この功績が評価され、1960年に日本農学賞が授与された。

また、先生は植物学や森林群落学の研究で培われた鋭い自然観に立ち、国立公園や国定公園の設立や景観維持あるいは阿寒湖のマリモの保護に見られるような自然保護の面にも大きく貢献された。これらの業績に対し、1949年には北海道文化賞、1972年には北海道新聞文化賞が授与された。



雌阿寒岳湖畔口4合目のトマツ林を学術参考林に設定するための調査（中央右の杖をもっている人が先生）

1972年10月28日（先生73歳）

7. 館脇先生の逝去

先生は、1976（昭和51）年3月中旬パイロット・フォレスト総合調査の最終打ち合わせ会議の直後、体調不良のため札幌医大病院に入院された。腹部腫瘍、腎不全の診断であったが、同年7月18日午後9時に心不全のため逝去された。享年77歳であった。

奥様美代子さまのお話では、病状が少し落ち着いてからは病院の数名の看護婦さんがベットの周りに来て、一緒に讃美歌を歌っていたとのことであった。奥様は熱心なクリスチャンであられたようであるが、

お元気な時の先生からは、宗教色は一切感じられなかった

葬儀は、先生の恩師宮部金吾先生が創立者の一人である札幌独立教会で行われた。1976年7月20日6時30分から棺前祈祷会、21日10時から告別式が行われた。喪主は美代子夫人、葬儀委員長は北大農学部植物教室村山大記教授が務められた。先生の死を悼み参集された参会者で、教会のメインホールや廊下は溢れていた。葬儀では、先生の略歴披露のあと時田先生の告別の辞があり、北海道大学学長、同農学部学部長、日本生態学会、日本植物学会、友人代表、門下生代表からの弔辞があった。火葬後の追想会にも多くの人が参集し、在りし日の先生を偲んだ。

8. 館脇先生の思い出

以下では、先生のお人柄を示すものとして私（五十嵐）の思い出を述べる。

先生は大の甘いもの好き

先生の教室を離れた1955年5月下旬、北見営林局の新局長にその年行う管内の調査を説明するため先生は北見に出かけた。どういうわけか同行するように言われ、お伴をした。氷雨の降る寒い日であったが、仕事を終え、3時過ぎに営林局の寮についた。寮からは北見駅が見え、駅前には何か看板がみえる。ストーブで暖を取っているとき、「五十嵐君は甘いものが好きか？」と聞かれ、「嫌いではないが、なければ困るほどでもありません」と答えた。ややあって、「この駅前には大きいオヤキを売る店があり、とてもおいしんだよ」。少々鈍い私でも先生はオヤキが食べたいと言っていることがわかり、雨の中でかけた。通常の大きさの2倍半くらいの大きいオヤキを5個購入し、宿にかえると「君も食べたまえ」と言って私に1個渡し、あっという間に残りの4個を平らげてしまった。

先生は美味しい料理も大好き

行きつけのお店は、札幌駅の近くにあった「北のイリエ」。一度だけ誘われてお店に行ったことがあるが、先生は作井シェフご自慢の牛タンシチュウを着に美味しそうにビールを飲んでおられた。

料理人の団体、社団法人全日本司厨士協会北海道

地区本部の顧問も引き受けておられた。ヨーロッパを旅されたときなど、食堂車のメニューを持ち帰り、会合の席で披露したりされたようである。先生は1969年7月に横浜からソ連船に乗り、約3週間ソ連を旅行された。同協会機関誌に「ソ連船での船旅」と題して8頁の紀行文を載せている。その半分は船のメニューである（同協会機関誌, 15(2), 1970）。先生が亡くなられた後、会報には2頁にわたる追悼文がのせられていた。これによると、協会の会合には毎回出席されていたことが書かれている（同協会機関誌, 21(3)）。

先生の文章力

先生は外国の旅がおわると、それぞれの土地の印象などを文章にまとめ、北方林業などに投稿されていた。読んでいて、無駄がなく、必要な情報は網羅されていて、いつも感心しながら読ませていただいていた。あるときこのことを先生に話すと、「僕はスケッチが下手で状況を正確に残しておけない。それで文章で記録を残すことを考え、文章の練習をした」と話されたことがある。

野幌の調査の時、特徴的な植生を解説する看板を立てることになり、営林局から原稿を依頼された。原稿は関東の看板屋さんに送られ、木材を彫り込んで制作されるとかで、大変高額であると聞かされた。看板代とは無関係であるが、限られた字数で要点を落ちなく表現することの難しさを知った。現場で先生が思いついた文案を口述するのを速記し、原稿を夜整理しておく。1~2日後には、山を歩きながら前の文章を読んでくれとなり、修正が入る。調査中はこんなくり返りで原稿が練られ、最終的には全体の原稿を再確認し、原稿ができあがることとなる。字数が少ない原稿ほど難しいことを知った。

阿寒湖のマリモ枯死問題

戦後、阿寒湖のマリモが大量に枯死する事件があった。特にマリモが多数生育するチュウルイ地区の被害が多かったようである。先生は学生を動員し、阿寒湖に船を浮かべマリモの枯死が水位の低下によることをつきとめ、北電をしかり、マリモの生息に安全な水位を順守させた。

戦争中（昭和19年）に歌才のブナ林を守った話

道南の黒松内には北限地域のブナの美林があり、昭和3（1928）年国指定の天然記念物に指定された。太平洋戦争の末期にその筋からの要請があり、歌才のブナ林を伐採する計画が進められていた。ブナ材の用途は、木製飛行機やプロペラの材料になるなどの風聞があったが、詳細は明らかにされていなかった。当時、倶知安営林区署に勤務されていた故川端功治氏（北大農学部卒）が伐採計画を担当していた。川端氏は学生時代、先生の講義を受けた教え子であった。川端氏の書かれた文章（黒松内ブナセンターだより, no. 60, 1996: no. 61, 1998）によると、ある日突然館脇先生が来訪され、「ブナは伐るな」、「絶対に伐らせんぞ」と大声で叫んだ。そして一気にまくしたてた要旨は「地球上の人類が、子々孫々まで永久に大切に保存しようとして取り決めたのが天然記念物なのだ。歌才のブナはその天然記念物に指定されているのだ。だから日本人はこれを守り通す絶対の責任がある。もしもこのことがあれば、俺は世界の学者になんとお詫びしてよいか」、「ブナは絶対に伐らさんぞ」と絶叫に近い大声だったと記している。

さらに、先生は川端氏に「君は組織の身、上司の指示で行動することは承知しているが、軽挙妄動を心配して飛んできたのだ。何分の指示があるまで絶対に手を出すな！」と念を押して帰ってしまったが、数日を経ないで歌才ブナ林の伐採中止の指令があった。先生がどこにねじ込んだのか、どんな役職の方に抗議したのか、皆目不明であったと記している。このことについては、館脇先生の弟子、故辻井達一氏が先生に生前質問したことがあり、雑誌「モーリー」の生物学者評伝「館脇 操」の中で紹介している（モーリー, 24, 2011）。館脇先生は北部軍にのり込んで、「天然記念物は勅令によるものだ、つまり天皇の命令で保護されていることになる。天皇の命令に反していいのか」と詰め寄り、軍も反論できず、伐採計画は撤回されたと記している。

先生の先見の明

1973（昭和48）年ころ北海道大学苫小牧演習林内を高速道路が通ることとなった。筆者は、道路公団との折衝メンバーの一人に加えられていたが、館脇先生は2度ほど経過を尋ねられた。高速道路を通さ

ざるを得ない状況をお話しした後、先生は道路公団札幌支社を訪れ、道東自動車道のルートの説明を求めたようである。そして足寄・本別までしかルートが決まっていないことを確認された。先生は、道路公団に対し、東京の本社と北海道支社で高速道路のルート決定の担当者を集め、道東自動車道の延長先に位置する阿寒国立公園がどういうものなのか自分が案内するから、現地でディスカッションしようと申し入れた。

この計画は3~4日かけて実施され、世界的に見ても一級品の阿寒国立公園の森林景観を見せ、学術的に説明も十分に言い、このような景観を破壊してまで高速道路を通すことは世界的に見ても大きな損失であることを力説されたようである。

帰札されてからお聞きすると、天気も良かったし、阿寒の重要性は十分理解したのではないかとっておられた。

先生のこの努力が道路公団にも十分に理解されたためか、現在工事中の本別一釧路間的高速道路は阿寒国立公園から離れた海側の土地に建設されている。

委託研究の調査項目を変更した話

帯広営林局標茶営林署管内には、度重なる野火により草原化した大面積の原野があった。林野庁ではパイロット・フォレスト事業と名付け、カラマツの大面積造林地を造成した。20年経過した段階で、帯広営林局では「造成20年後の環境の変化」というテーマで総合研究の代表者を館脇先生に持ち込んできた。

当時マスコミによく出ていた女性が、パイロット・フォレストの森林の造成により流れ出す水がきれいになり、川の終点の厚岸湾では牡蠣稚貝が自然の状態で増殖するようになったと論じた。

帯広営林局ではこの問題も総合研究の1テーマとしてきた。先生は研究組織の中に、研究分野が近い国立林業試験場北海道支場長の遠藤泰造氏（北大林学科1953年卒）に入ってもらい、このテーマを担当してもらおう腹積もりでいた。しかし、遠藤氏はこれを拒否した。理由は、源流部の森からきれいな水が流れ出ても、厚岸湾との間の別寒辺牛川流域には多数の牛が放牧されており、牛は川で水を飲み、糞尿を垂れ流している。その汚れた川水が厚岸湾に流れ

込んでいるので、問題の立て方が間違っている、というものであった。

遠藤氏の主張を了解した先生は、厚岸湾の漁業者を集め、座談会を開くことを営林局に提案し、いつの頃から牡蠣稚貝の自然増殖が始まったのかを聞きだした。漁業者は厚岸湾の水位が高くなってからであると話した。先生は、営林局の担当者に座談会の記録を整理させ、帯広営林局報に掲載させて総合調査の一項目の回答とした。

総合調査の事務局を担っていた私にとっては、先生の対応は大変勉強になった。

私の大学院進学

卒業論文を仕上げた頃、先生から「君も知っているとおりに、当学科出身者が引き続き私の所で勉強したいと言っているので、君の面倒は見れない」という趣旨の話があった。私は出身の林学科にもどり、森林病理学分野の研究をしたいと考えていることを話した。当時、カナダから原生的な主要樹種の森林を一定面積伐採し、樹木内部の菌類による腐朽状況を調べた論文が継続的に出されており、この分野に興味を持っていた。

こんなことがあり、館脇教室を円満退社のはずでいたが、大学院ではその後も女満別の鉄道防雪林を天然記念物にするための基礎調査を手伝って欲しいなど、時々動員がかかった。



サロマ湖東岸からオホーツク海への開口部ワッカ半島の植生調査に向かう館脇先生と手伝いの北見営林局計画課の人たち。座っている人の手前が先生。

周りの座っている人たちは国立科学博物館の先生方。

1957年7月（先生57歳）

活動報告

北大総合博物館中川光弘館長にインタビュー

編集委員 大山 圭也・星野 フサ

2016年7月26日にリニューアルオープンした北大総合博物館は、新聞やテレビなどマスコミにもたびたび取り上げられ、北大のホットスポットとして注目されています。

12月20日(火)に開かれた総合博物館忘年会の前にお時間をいただき、2階館長室で中川北大総合博物館長にインタビューをしました。30分ほど和やかな雰囲気の中、事前にお伝えしておいた質問事項を中心に館長のお考えを伺いました。以下に簡単に報告いたします。

◆リニューアルの目玉の一つである学部紹介展示に各学部の協力を得るのは大変だったと思われるが、そのへんの苦労話をお聞かせください。

◇北大の全部は展示できないので、受験生のことを考えて12学部の展示ということで進めました。学部展示のイメージづくりは工事が始まってからとなったので、開館までの時間が短く大変でした。展示の考え方について学部によって温度差がありました。イメージをつかんで準備をし、予算を考えてなど大変な作業でしたが、各学部の担当者の皆さんは途中から熱心になってくださり、苦労は消えていき、展示内容をもっと増やしたい、となっていました。

◆リニューアルオープンから入館者10万人達成までの間に御苦労された点などについてお聞かせください。

◇リニューアルオープン後約3か月の11月16日に10万人の来館者となったことは嬉しい悲鳴です。従来の3倍のペースで来館者が増えています。皆様に感謝したいです。この先いろいろの工夫をして、リピーターを増やしていきたいです。反響が良いのは学部展示です。博物館の定番ではなかった医学部、歯学部、法学部、経済学部、教育学部などのいずれの展示も反響が良い。そして、リピーターをどのように増やしていくかが、これからの課題と考えています。

◆北大総合博物館にボランティア登録している方々に要望や期待がありましたらお聞かせください。

◇北大総合博物館のボランティア登録者は、現在200人を超えています。登録されている皆さんに感謝しています。博物館の活動はみなさんの応援がないと成り立たないので皆さんに感謝しています。いろいろの活動に今後も、取り組んでいてもらいたいです。標本整理や標本登録などのほか展示解説についても、さらに活動してもらいたいです。

◆今後の抱負についてお聞かせください。

◇今後の課題として、考えているのはキャンパスミュージアム構想です。たとえば植物園や文書館との連携です。文書館、第二農場、函館の水産科学館など標本・資料を保管し展示している施設が北大には複数あります。これらが連携してキャンパスミュージアムとして活動してゆきたいのです。博物館はその中核施設となるべきと考えています。

例えば、博物館への来館者を対象に第二農場や文書館ツアーを組んでも良いのではと考えています。旧理学部のこの博物館だけでなく、市民の皆さんに北大全体をアピールしていただきたいのです。

北大は立地が良くたくさんの来館者がこられるのでボランティアの皆さんと力を合わせて大きな目標に向けて取り組んでいきたいのです。



館長とのインタビュー(右一中川館長)

活動報告

「北大古生物学の巨人たち」の準備にあたって

資料部研究員 越前谷 宏紀

1月31日から4月2日まで、冬季企画展示「北大古生物学の巨人たち」が開催中です。

ちょうど去年の今頃でしょうか、準備を始めました。北大理学部地質学鉱物学科・古生物学研究室の黎明期の5人の先生方にスポットを当てて展示をつくるということで、先生方に関わりのある標本のリスト作りから作業は始まりました。

北大の収蔵庫にある化石標本は、基本的に標本番号順に整理されているのですが、一部のタイプ標本や記載論文に使われた標本が通称「タイプ棚」と呼ばれる棚に収められています。

特に貴重な標本は別の棚にしまっておこう、という考え方からすれば、もっともなやり方なのかもしれませんが、すべてのタイプ標本が「タイプ棚」に収められているわけでもなく（やろうとすれば何年もかかると思います）、ある標本が番号順の棚にあるかもしれないし、「タイプ棚」にあるかもしれない、というのは収蔵庫内で標本を検索する身になってみれば厄介な話です。正直個人的にはこんな棚はなくしてしまいたくもなるのですが、なんらかの経緯から、そういう棚が1つあります。

そこで「タイプ棚」に収められている標本の詳細について調べ始めたのですが、当時博物館は耐震工事中でして、収蔵庫の標本は棚ごと農学部の地下ピットに退避していました。棚はぎゅうぎゅう詰めになっていて引き出しの中は確認できない状態でした。

最初は写真家の石崎さんが撮り溜めていた写真とデータベースだけが頼りで、図書館から理学部紀要をダウンロードして論文中の写真と石崎さんの写真を突き合わせて、標本の素性をチェックしていきました。標本の引っ越しが終わってからようやく実物を確認しながら作業できるようになりました。

当初の目論見では、多くの標本が「タイプ棚」にあると期待されていたのですが、ほとんどが長尾先生関連の標本で、他の4先生のものは別に探

し直さなければいけない、という結果になりました。

化石データベースには論文著者や収集者の欄があつて、これも全部記載されているわけではなく、ほんの一部だけデータとして載っているのですが、この箕浦先生の時代に集積された情報を手がかりに、5先生の標本を探すことにしました。

展示にあわせて出版した図録『北大古生物学の巨人たち』には、ここで作成した標本リストを「北大の宝」（合計1,175種）として掲載しています。元は人が手で打ち込んだデータなので、たくさん間違いがありました。そしてたくさん空欄がありました。出版にあたり空欄があると格好悪いので、5先生の論文を漁って標本の情報を確認してデータを補充し、あわせてデータベースの記載に間違いがないか確認し修正作業に追われました。

幸いにも、加藤誠先生がご健在でリストをチェックしていただき、おかしいところを指摘していただきました。湊・加藤の両先生はご専門がサンゴ化石で、標本は薄片プレパラートとして収蔵庫に保管されていますが、私のような普通の化石を扱う人間にとってはちょっと近寄りやすい標本群で、ちらっと覗いてはそっと引き出しを戻すくらいなことしか、今までしたことがありませんでした。今回展示されているプレパラート群は加藤先生の撰によるもので、その意味でも貴重なものです。トレース台上の一風変わった展示もあわせてお楽しみいただけたらなと思っています。



サンゴ化石のプレパラート標本

活動報告

陸上植物標本庫 (SAPS) を新しい分類体系 (APGⅢ) に変更

植物ボランティア 吉中弘介

2014年からの博物館の耐震工事に伴い、館内の多くの収蔵品と同様に、陸上植物標本庫(国際略称 SAPS)の標本も一時仮の場所に引っ越ししなくてはならないことが判明したのを機に、高橋英樹先生とご相談の結果、改修後標本を元の場所に戻すときに、SAPSの標本の配列をこれまでの旧分類体系(エングラ)から最新の分類体系(APGⅢ)に変更することとなりました。

この分類体系の変更の具体的な例として、北大のシンボルのオオバナノエンレイソウの属するエンレイソウ属はユリ科からシュロソウ科に変更されています。このような変更は分類に最新の DNA の解析結果が導入されたことによりますが、このため多くの植物に科や属の変更がなされました。

このように耐震工事後、新標本庫に標本を戻すときに新しい分類順に標本を配置換えするために、次のような計画をたてました。標本庫の移転に際し、標本はすべて段ボールに詰め替えて移動しますが、移動先で段ボールから取り出して、そのまま元のキャビネットにそのまま配架し、移動先での仮標本庫でも閲覧可能にします。次に工事が終了して新標本庫に戻す時に、また段ボールに詰めることとなりますが、このとき標本を新しい分類体系に合わせて順次詰めてゆき、運搬後詰めた順に取り出して最初のキャビネットから順次配架すると、すべての標本は新分類体系に配列されることになる計画です。

この計画を実現するには、かなりの準備作業と実作業が必要でした。また当館の SAPS は北海道・サハリン・クリルの標本が国際的にも充実しているのでこれに主力を置いて作業を進めました。

まず、すべての標本庫の各キャビネット内の各棚に収容されている種カバー(1つの種の標本を収容する二つ折りの紙)の植物名とキャビネット内の位置情報をすべて書き出す現状調査作業を約6か月かけて行いました。次にこの調査結果に基づき学名をプリントしたラベルシールを作成して北海道・サハリン・クリルの全標本の種カバーへ貼付し、新学名へ

の整備と視認性の向上を図りました。この作業は約4か月を要しました。さらに各々の種カバーのキャビネット内の位置情報を入れたリストを作成し、これと作成済みの新分類体系の(維管束)植物リストと合体したリストを準備しました。

工事が終わって仮標本庫から新標本庫へ運ぶ段ボールに収容するときに、この合体したリストの順に従い、点する各キャビネットの各棚から該当する種カバーを選び出して順に段ボールに収容して行く。と新分類体系で配列された段ボール群が出来上がり、これを新標本庫に運搬し、詰めた順から種カバーを取り出して最初のキャビネットから順に配架して行くと、すべての標本が計画どおり新分類体系に配列されました。

これらの作業は植物ボランティアの皆さんのほか、図書ボランティアの有志の方、アルバイトや先生をはじめ博物館関係者の方たちも参加していただき、大変な作業でしたが、皆さんの頑張りでリニューアルまでに何とかやり終えることができました。

高橋先生にお聞きしたところ、国内の大きな植物標本庫で最新の分類体系で整備された標本庫は国立科学博物館に次いで北大総合博物館の SAPS が、一部未整理な部分もありますが、2番目だとのこと。

終わりになりますが、最近学内の予算削減の余波を受けて博物館にも影響が及びつつあるようです。植物標本庫にかかわる一市民であるボランティアの立場からの感想ですが、今後も含め標本庫の維持管理が心配です。管理する人員体制に懸念があることから、国内外からの標本閲覧要請への対応、国内外の機関との標本の交換や新たな標本の受け入れ、最新の文献の整備、新たに追加される標本を収容する標本棚の補充、建学以来積み残しされてきた膨大な未整理標本の整理など多くのことが気にかかります。

いっぽう、植物ボランティアの人員体制が充実しつつある現在、お手伝いできる部分は限られますが、全体の充実に向けて安心して活動できる環境を願っています。

活動報告

4D シアター ～リニューアル後、初めての公演を終えて～

北海道大学大学院 農学院 環境資源学専攻 農業土木学研究室

4D シアターボランティア 関上 遼

12月18日に4Dシアターは博物館のリニューアル後、初めての公演を迎えました。前日からの雪にも拘わらず、子供連れや海外からいらした方など、多くの参加をいただきました。初回公演から12年、多くのボランティアや教員の方々に支えられてきた活動でもあったため、今年度の活動を良い形でスタートできたことに感謝と安堵の気持ちが溢れました。

4Dシアターでは、国立天文台のオープンソースソフトウェアのMITAKAと3Dプロジェクタシステムを用いて、北大の研究分野等に関するプログラムの公演を行ってきました。天文や宇宙といった分野を中心に、1時間程度で公演を行います。公演内容は毎回、学生ボランティアを中心として企画されてきました。さまざまなアイデアがたくさん盛り込まれたオリジナルストーリーは人気の理由の一つです。

2015年4月から始められた北大総合博物館の耐震工事やメンバーの卒業の影響も受け、2016年7月のリニューアルオープンまで4Dシアターの活動は休止されていました。

学生メンバーも大きく変わりました。そのため、12月の公演は私を含めた新規の学生とベテランのボランティアの方を含めた約6人で迎える初めての公演となりました。当日の司会や発表のほか、宣伝・広報のためのフライヤーやポスター作りなどの事前準備にも力を注ぎました。公演のテーマは「宇宙人ってホントにいるのかな？/想像する宇宙」でした。前半と後半の2部構成で、前半の「火星のお話」を北大総合博物館の山下先生が、後半のMITAKAを使った「宇宙人いるのかな？」を工學院の福澄さんが担当されました。前半は、火星にスポットを当て火星研究の歴史と活躍された研究者についてお話いただきました。後半は、MITAKAを用いて、火星や他の惑星を巡るとともに、宇宙に潜む新しい生命体=宇宙人との出会いに思いを

馳せました。午後に2回の公演を実施しましたが、どちらの公演も多くの方に参加いただき、次回公演への期待の声もいただきました。

この一方で、反省点もあります。今回の公演では、学生やボランティアが裏方となり、発表は山下先生や福澄さんに大きく力を借りる形となりました。また、機器操作や会場設営、使用する楽曲など、4Dの世界観を参加者の方々に伝える工夫も今後の改善点の一つとして挙げられました。博物館の理念に沿った公演テーマやストーリー構成などを改善し、次の公演に望んでいきたいと思っております。

4Dシアターは毎月第1、第3水曜日を中心に活動しています。世代や背景が異なる様々なメンバーがひとつの活動に尽力していく難しさや楽しさを感じながらの活動です。長く続けられてきた4Dシアターをより良いものにしていけるよう、多くの方々に足を運んで頂けるよう頑張っていきたいと思っております。

次の目標は、4月公演の成功です。これを読んでいる皆様にもお立ち寄りいただければ嬉しく思います。

博物館1階の4Dシアターでお待ちしています。素敵な星空と宇宙の世界を見ていただきたいです。

最後になりましたが、4Dの活動を支えるボランティアの皆様に感謝致します。



活動風景

記念碑紹介

工学部前庭の吉町太郎一博士像と室蘭の吉町坂記念碑

図書ボランティア 久末進一

本学の工学部校舎前庭には吉町太郎一博士（1873-1961）の胸像が1960（昭和35）年に建立され、学生たちを見守り続けているが、道南の工都室蘭市にも博士に由来する地名と記念碑が存在することを御存知だろうか。

室蘭工業大学「明德寮」寮歌「北斗の光」（入江伸作詞・作曲）の一節に朗吟される『吉町坂に風黒く 夜霧に沈む明德寮 朴履の音もたからかに』と歌詞そのものを刻んで、室工大を望む「吉町坂」にその記念碑は建つ。

室蘭市中島町から同大正門へ抜ける坂道の途中に、この『吉町坂記念碑』は1996（平成8）年6月に同大同窓会によって建立された。

室工大の前身「室蘭高等工業学校」が室蘭市水元町27-1に開校したのは1939（昭和14）年のこと。この時、北海道帝国大学名誉教授だった吉町博士が初代校長に迎えらる。既に橋梁工学の権威で、北海道庁の依頼により、旭川のシンボルとなった石狩川の鉄橋「旭橋」（橋長226m）を昭和7年に生み出している。

吉町博士は、1891年東京帝国大学土木工学科卒業。同大助教授時代に、廣井勇教授に師事した。明治35年から3年間、ドイツ、アメリカに留学。帰国後名古屋高等工業学校教授。1911年九州帝国大学工学部教授。1919年北海道帝国大学工学部創立委員となり、1924年に初代工学部長となる。1931年まで務め、1936（昭和11）年に定年退官。

特にその高潔で柔和な人柄が、学生たちに慕われた。それは室蘭高等工業学校に赴任した後も同様で、「吉町坂」はこの吉町太郎一初代校長にちなむ。

同校は機械、電気、工業化学、採鉱、冶金の5学科が置かれ、1944（昭和19）年には「室蘭工業専門学校」に改称される。時代は日中戦争から太平洋戦争へ向かう“疾風怒濤”の時で、召集を受け、戦地へ旅立つ先輩たちが超えてゆく「吉町坂」で、見送る寮生たちは万感の想いであった。

その名が生まれたのは1941（昭和16）年頃。汗を流した運動部員らが坂道の途中で小休止、談笑中にひらめいたという。

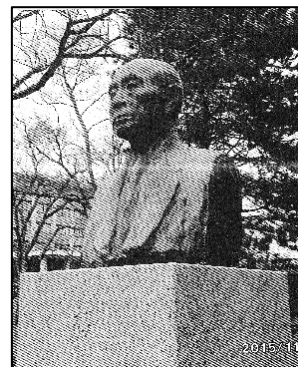
その吉町博士を育て、近代土木の礎を築いた廣井博士は1862（文久2）年生まれ。高知県佐川町出身、札幌農学校二期生。初代小樽築港事務所長。1897（明治30）年に日本人による初の外洋防波堤築堤工事に着手し、1908年完成。耐海水性、耐波性でコンクリート製防波堤が有効な事を立証した。完成から100年以上、まだ現役で小樽港を守っている。

豊平川の「豊平橋」も廣井博士指導で1924年完成。その橋梁形式が吉町博士の「旭橋」に継承されている。そして、その廣井博士を育てた人物こそがウィリアム・ホィーラー（1851-1932）である。

ウィリアム・ホィーラーは、明治9年に開拓使の招きで来道、翌年からW・S・クラーク博士の後任として二代目教頭に就任。滞在中に廣井ら二期生に土木技術の基礎を教え、札幌時計台設計はじめ、橋や鉄道の関連施設の設計を手がけた。

「吉町坂」から系譜をさかのぼれば、意外な人脈がみえてくる。戦前から戦後へ、北大附属土木専門部との編成校として室工大が誕生したのは、1949（昭和24）年5月のこと。以来、今日までこの坂道を通って巣立つ者、新たな技術者への夢を胸に集まる者の群れは続く。

『吉町坂記念碑』は青春の道標である。



吉町太郎一博士記念胸像（工学部前庭）と
室蘭の「吉町坂記念碑」（室工大正門前坂道）

博物館見学記

初めての「豊平館」

図書ボランティア 宮本 昌子

2月4日(土)午後、中島公園にある「豊平館」の見学に行った。私は毎月キタラに通っているので「豊平館」の存在自体はよく知っていたが、中に入ったことは約50年前の友人の結婚式以外になかった。前方を在田先生以下数名が歩いているので後について行ったらキタラの方に左折する手前の右側の舗装された道に入り、今まで「豊平館」の陰にあって見えていなかった真新しい別棟に入って行った。そこが「豊平館」見学者の入り口だった。

さて本題。「豊平館」は明治13(1880)年開拓使の依頼で大岡さんという大工さんを中心として、現在市民ホールのある北1条西1丁目に洋風ホテルとして作られ、翌14年8月に開館し、同年の明治天皇行幸時の宿舎(行在所)とされ、明治18(1885)年には宮内省の所管となり、その後、大正天皇、昭和天皇も皇太子時代に来道された際の宿舎として使われた。この時(大正11年)に「豊平館」は宮内省から札幌市へ移管(下賜)され、昭和2(1927)年には、1,500名収容の大集会所(公会堂)も付け加えられた。

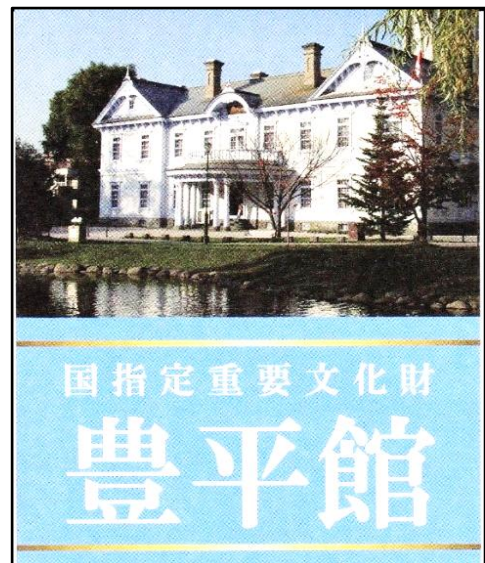
昭和33(1958)年に新たな「市民会館」の同地への建設に伴い、中島公園の現在地へ移築され、市営結婚式場としての利用がスタートしたのだった。その後、昭和39(1964)年には国の重要文化財に指定された。

さて、北海道を訪れた歴代の天皇の宿舎として造られ使われてきただけあって、各部屋には花の名前がつけられ、使われている調度品や内装品、

カーテン等の布地が西陣織だったり、シャンデリアは電化以前はガス灯で、ガスパイプが中に通っているし、「鹿鳴館」より前に舞踏会が開かれていたと、いわれている広間は床が補強されジュウタンも厚地のしっかりしたものだそう。

なお、「豊平館」の外部正面から見える2階のバルコニー上壁面にかけてある木の看板の「豊平館」の文字は、明治天皇を補佐していた三条実美(さんじょうさねとみ)の筆になるもので、明治22(1889)年には、黒田清隆辞任後の内閣総理大臣も勤めた人物である。

耐震補強を含む保存修理、活用整備工事が終了した現在は、日中は「博物館」として、夜間(午後5時以降)は、講演会、演奏会、会食、結婚式等に利用できるという。



入場チケット半券・建物全景

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 44

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員：星野、今井、大山、児玉、沼田、久末、山岸)
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2017年3月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>